SINCE 1991 FOR CINEMA FAN

NEW movin'on

Vol.8

TAMA CINEMA FORUM NEWS

2001 May 5

発行: TAMA映画フォーラム実行委員会　住所：〒206-0025 東京都多摩市永山1-5　多摩市立永山公民館内
TEL：042-337-6661　FAX：042-337-6003　URL http://www.tamaeiga.or.jp/
会報編集委員：遠藤亜佐子、鴨志田祐史、佐藤セーロー、菅井康博、中田温朗、夏井紀久子、野村浩利
舟口聡、増田雅子、真鍋薫子、望月裕香

Movie最前線　あの人に聞け！　第二回　矢口史靖監督

今回は新作『ウォーターボーイズ』の公開が待たれる矢口史靖監督です。「監督業はサービス業」と言い切る、エンターテイメントにこだわる監督のサービス精神旺盛さが伺える、今までにないインタビューです。

―まずお名前の“史靖（しのぶ）”ですが、名前のいわれというのはあるんでしょうか？

矢口監督「知らないです。」

―親から聞いたりとかは？

「ないですね。自分でも考えたことないですよ。やだなとずっと思ってました。何か女みたいだし。」

―どんな子供でした？どんな遊びをしていたとか。

「人を笑かすのが好きでしたね。」

―クラスではやっぱり人気者でした？

「それはなかったですね。おちゃらけがいきすぎて、けっと思われてしまうというか。中学くらいから、もう目立つとけっと思われるのなら、隠れてしようと思うようになりました。いたずらをして誰が犯人か気づかれないけど、それで慌てていたりびっくりしていたりするのをよそから眺めているのが楽しいというか。落とし穴に近いですね。」

―好きなＴＶ番組とかは？

「『日本沈没』。怖さに震えてましたね。『バイオニックジェニー』とかね。『６００万ドルの男』って知ってます？あれの女版でね。現実から地続きのとんでもない話というか。ドラマで。」

―それはアメリカのドラマですか？

「はい。『バイオニック～』は。」

―あの頃パニック系ってはやりましたよね。そういうものが好きだったんですか？

「好きでしたね。『ジョーズ』とか『グリズリー』とか。やっぱりリアルな現実と地続きの怖さというのが好きでしたね。完全にＳＦだったりとかそういうのではなくて。現代の人間が、リアルにそんなことがおきたらどうなっちゃうんだろうって。」

―よくマンガが好きっておっしゃってますけど、好きな作品とかは？

「特にこれが大好きというのはなくて。週刊マンガとか一切買っていなかったんですよ。普通に好きだっていうだけで。いまだに週刊マンガって読んでないんですよ。」

―（マンガの）原作をしませんでした？　最近。

「ああ、あれ書き始めて、初めて連続で週刊マンガを読みましたね。」

―じゃあ普段は単行本で読むほうですか？

「そうですね。人から薦められて面白いなーと思って借りて全巻揃えるってことはありましたね。途中で5、6話だけ読んでても面白くないから。続けて読んでいなかったから惰性で読まないですね。普通の子より好きだったのか言われると・・？まあ好きは好きですけど。嫌いじゃないです。」

―好きな音楽とかは？

「聞かないですね。今でも聞かないです。」

―じゃあ部屋にアイドルのポスターが貼ったりとかは？

「なかったですね。映画のポスターはありました。ガンダムのポスターもありました。」

―高校では何か部活とかしてました？

「美術部でした。」

―その後、大学で映研に入って、鈴木卓爾さんと知り合って。1年先輩で、今でも一緒にお仕事されたり。卓爾さんの第一印象ってどうでしたか？

「突飛な人だなーと。大学入るまで映画を自分でつくろうなんて思っていなくて、(高校時代)美術部に入っていたから、絵でやっていこうかなと漠然と思っていて。絵はまあ苦手ではなかったので、特技を生かして受験するならというので、美大をいろいろと受けたら、造形大学に受かって。新入生を勧誘するための部活・クラブ紹介で、ほかの連中はみんなしゃべりでやっていた中で、いきなり部屋が真っ暗になって映写機が回って映画が始まったんです。それが映研で、鈴木卓爾が作った映画を上映したんですけど、素っ裸で山を走り回ったりしてるんですよ。馬鹿だなーと思いつつも、結構面白くって、会場にいた映画なんかに興味のない連中にもうけていたんですよ。

これってもしかして絵を描くよりもお客の気持ちをダイレクトにつかめるのかなー、映画って自分でもつくれるのか、と衝撃を受けましてじゃあ作ってみようとそのまま映研に入ったんですけどね。」

―じゃあ卓爾さんの影響は大きいと。

「そうですね。すごく目立つ存在だったんですよ。作る作品どれも面白かったし、自分で出て自分で撮っていて。パフォーマーに近いんですけど。で、俺が2年の時かな。彼がＰＦＦに出品した作品が入選したんですよ。『虹』っていう。ＰＦＦって何だろう？ってその頃やっと考え始めて、でっかい会場で上映するし。ライバル意識が芽生えて。」

―それで『雨女』で90年にＰＦＦのグランプリとってスカラシップの権利をとって。93年に『裸足のピクニック』を撮って。この時面白いのが「裸ピク新聞」。これはどこから発想したんですか？

「あれはパンフをつくる予算がなくって、ペラ一枚で何か印刷物をということで新聞だーと思って。うそっぽいけど本当の記事がいろいろと載っていて、個人で編集・印刷したんですよ。もうバックナンバーはほぼないですね。あちこち上映会やっているうちにはけちゃったんですよ。」

―一部百円でしたっけ？

「はい。純利益は全部自分なんですよ。当時それで暮らしていましたからね(笑)」

―『裸足のピクニック』の主演の芹川砂織さんは監督自らスカウトしたんですよね？どうやって声を掛けてＯＫをもらったんですか？

「当時誰も知らないですしね、僕のこと。(彼女のことは)ぴあの隣にある喫茶店でしょっちゅう見ていたはずなんですけど、まったく記憶になくて。

だけどその日に限って、もう煮詰まっていてプロデューサーには決めろよと言われていて、逃げるように喫茶店に入ったら「あ。こいつがいるじゃん。」って、「すいません、隣のぴあでこれから映画を作ろうとしてるんですけど」って話し掛けたんですよ。「バイト明けにぴあに来て下さい」「いいですよ」って。「しめた。」って。

俺は俺で彼女を逃がしたらわけわかんないタレントに決められちゃうから、「決めました。今からもう彼女来ますから。」って言ったら、プロデューサーは「えらいっ。お前にそういう度量があるとは思わなかった。」って誉められて。もうみんな主演女優が来る！ってぎらぎらした目で彼女迎えたんですよ。それでバイト

明けに彼女には何も言わなくって、台本これって渡して、「じゃあ明日返事します」って台本持って帰ったんですよ。後半に泉谷しげるさんにレイプされるシーンあるから、あんま深く読まれても困るなーって思ってたら、次の日お母さんと一緒に読んだらぜひ出ろといわれたって（笑）二つ返事で。芝居ができるかどうかもわからない素人だったですけど、決めちゃったんですよ。」

―今から思うと鈴木砂羽さんも出てますよね？どういう経緯で？

「砂羽ちゃんは浜松の子なんですけど『雨女』の上映を浜松でやったときに『雨女』を通して知り合いまして。浜松の自主映画の団体のなかでは砂羽ちゃんすごい有名で。面白い子だなーと思って。ちょうど彼女大学生になって東京にいたんで、出てもらって、いいじゃんいいじゃんってみんなで思ってたら、文学坐に入ってね。」

―井口昇さんは？

「鈴木卓爾監督の作品のカメラマンをやったんですが、それに出演してたんですよ。『空気銃と中田』って。幻の作品ですよ。完成せず終わっちゃいましたね。彼は専門学校生だったですけど、老けてたんで、鈴木卓爾の図々しい兄貴役だったんですよ。

『雨女』には鈴木清順監督が少しだけでてるんですが、井口くんが通っている専門学校の講師をしてたんですよ、それを現場中に聞きつけて、だったら俺を生徒だってことにして清順さん撮影させてほしいって井口くんに言ったら、授業にもぐりこめばＯＫっすよって。生徒のフリをして授業終わった後にワンカット撮らせてもらえないですかってまんまと撮影して無許可で使ってます（笑）。本人も知らないです。

若い頃に知り合った連中でいまだに活躍してるってのは砂羽ちゃんとか井口くんとか卓爾とかで。当時から絶対売れるとかそういうのは別に俺にも本人たちにもなくって、今のことなんて誰にもわからなかったです。続いちゃったというか。」

―次は『ひみつの花園』ですよね。西田尚美さん主演の経緯というのは？

「東宝でキャスティングディレクターという人がいて、相談してたんですけど、なかなか決まらなくって。ある日彼が持ってきたのが「ビューネ」のＣＭのビデオだったんですよ。とても滑稽でかわいかったんですよ。それでイメージに近いかなと。」

―その後の『アドレナリンドライブ』の主演安藤さんを見ててもそうなんですが、主演がだんだん矢口さんに似てきますよね？

「そうするつもりは全然ないのですが、よく言われますね。物語をひっぱる中心人物のリアルな気持ちを追いかけていくと、自分ならどうするかって台本書くんですよ。だから仕方ないんですかね。」

―顔つきまで似てしまうっていうのは？

「うーん。監督のキャラクターに主要登場人物が似るっていうのはよくあると思うんですよ。井筒さんの作品ってみんなちゃきちゃきな感じで。井筒さんの言葉で接して話していくうちに伝染するんじゃないですか。監督病が感染するんだと思います。」

―（『ひみつの花園』のパンフをめくり）このパンフについても監督の意向がかなり反映されていますよね。

「これもほとんど私が作ってますね。やりすぎたなと反省して、もう今後はパンフには参加すまいと。」

―一昨年公開の『アドレナリンドライブ』についてですが。これでエンターテイメント作ったら日本で一番という評価をされるようになったと思いますが。

その頃から「監督はサービス業だ」っていう発言が目立つようになるんですが、この作品でその考えが確立したんでしょうか？

「いつから言い出したのか自分でもわからないですけど。最初に映画を作ったときから、卓爾の上映を観てお客が喜んでいるのがすごいと、こんなに大勢を相手にいっぺんに楽しませることができるんだという刺激だったわけで。

作って内輪だけで観るとかじゃなくって、自分のことを知らない人に見せてびっくりさせたり、笑わせたりしたいなという欲求で、お客を楽しませることまで含めて映画って面白いというところか

ら始まっているので当然のことだと思っているのですよね。「サービス業」というのが一番しっくりくる言葉かなと。」

―そういう意識は本当にパンフレット一つにしてもいろいろなところにでてますよね。

「そうですね。（『アドレナリン～』以降）専門家にまかせたらやっぱりサービス精神にはひとによってレベルがあって、まあこれ（『ひみつの花園』のパンフ）はやりすぎですけどね。「～と監督は言っている」って自分で書いてますし（笑）」

―現場でも父親以上の年齢のスタッフもいる中で、そういうサービス精神が伝わっているんじゃないですか？うまく動かしている秘訣は？

「『動かしてる』なんて感じじゃないですよ。お世話してもらっている。自分では出来ないですし。専門的な部分は本当にお任せしなきゃ出来ないですよ、共同作業が必然ですよ。」

―それまで使ってたミニチュアを『アドレナリンドライブ』では使っていませんよね。何か意識の変化とかあったんですか？

「使った方が面白いシーンにミニチュアを使ってるだけで。『アドレナリン』でもやろうと思えばやれたんですけど、切迫したシーンに「あ。ミニチュア！面白い！」という絵を入れたときに、お客の感情は連鎖的に物語に乗っかっているかというと、やっぱり一度途切れてしまうわけで。ミニチュアの面白さに引っ張られてしまって。それはやってはいけないことだから、ミニチュア使わないんですよ。まあ内容によりけりですよ。」

―今後も使わないわけではないと。

「はい。もちろん。別に方針を決めて映画を作っているわけではなくって、ただまたバカな映画を撮りたいなって。」

―「ワンピース」についてお聞きしたいのですが。

「『裸足のピクニック』の後に始めてずっとですよ。」

―今後も作る予定は？

「作りたくなったらですね。」

―話しが変わりますが「映画ちゃん」っていう組織はなんだったんですか？

「ああ。あれは『裸足のピクニック』の撮影終了から公開までぴあの紙面に連載を持ってたんですよ。漫画で『映画ちゃんへの道』っていうんですけど、映画の現場でいっぱしの撮影スタッフと認められるとちゃん付けで呼ばれる（笑）。

「矢口ちゃん」「鈴木ちゃん」って。業界でちゃんの称号をもらう入り口ってね。1ページ一話完結で、映画業界に入るにはとか、どういう仕事があるのか、自分はどうやって入ったかって身近なネタをもとに書いていたんですよね。最終回の前に読者から、マンガには大学にセット募集の求人の張り紙があるって描いてあるけど、うちの大学にはないですってはがきがきて。

実際業界人手がたりてないような状況だし、だったら映画の仕事を紹介する機関をつくったらどうって提案したんですよ。最終回に。そしたら二百人くらい集まってね。で、仕事を紹介したりね。スタッフとかエキストラとか。「映画ちゃん」事務所ですね。『ヒーローインタビュー』とかクレジットに映画ちゃん協力ってでてるんですよ。ただ俺が手を離したら稼動しなくなってしまって。解散してしまいましたね。」

―また『ワンピース』に戻りますが、田中要次さんがよく出てますよね？

「『興味ある？』って聞いたら『あるある』って。やりだしたら面白いっていうん

で、しょっちゅう来てくれるようになったんですよ。自分の出番がなくても来るようになって（笑）。たぶん一番出演作品多いんじゃないですか。」

―さて新作の『ウォーターボーイズ』ですが、まず台本完成にどのくらい費やしたんですか？

「ペラで10枚くらいのシノプスを3、4ヶ月かけて10回くらい書き直して。プロデューサーとこの線でいきましょうってなってから（脚本を）3回くらい書き直して2000年9月15日にクランクインなんで、その10日前に決定稿をだしましたね。だから7、8ヶ月ですかね。」

―『ひみつの花園』は卓爾さんと共同脚本で、それ以降というのは？

「『アドレナリン～』は興味ないと言われて一人でやりました。当時、彼はNHKの「さわやか3組」の脚本を書いててアップアップなんで、今回は誘えませんでした。今後ももちろんお願いしたいですけど。」

―（『ウォーターボーイ』の台本をめくり）それで主人公（の名前）がこれまでと同様、鈴木、佐藤、太田・・・。この名前へのこだわりのなさというのは？　野良犬（の名前）がパブロフだし（笑）。

「これは実家の犬がパブロフでね。名前はお客さんが覚えなくていいかなーということで、わかんなくなっちゃうと思うんですよ。「綾小路なんとか」とか、ふだん人の名前すぐ覚えないでしょ。ふつうの人なんだから覚えさせちゃいけないと思って。まあずっと鈴木、佐藤で、ほかのよく聞く名前に変えてもいいけど、そこらへんにある名前なんで気に入ってます。」

―台本をさわりだけ読んだんですけど、げらげら笑いましたね。

「字幕なしで外人も笑える、動きの映画ですかね。まあMOVIEっていうくらいですから。シンクロの話なんですけど、シンクロのシーンは最後ちょっとだけなんですよ。「水着の女王」みたいなレビュー映画にしようと思って、最後のシンクロシーンを派手にすごいのを見せようとね。なんかヴィンセント・ギャロが「すべてのストーリーはラスト10分のためにある」って言ってますけど、これ本当前半無茶苦茶ですよ。高校が舞台なのに、授業のシーンないですしね。」

―撮影現場の雰囲気はどうなんですか？

「いつも撮れるかどうかぎりぎりのところでふんばっていますからね。スタッフのみんなが自分のことをどう思っているかはわかりませんね。」

―もちろんスタッフとのトラブルが起きることもあると思うんですが。

「ケースバイケースですね。理由がわからないときも終わってからわかるときもありますし。あとは図にして説明したりね。僕は怒れない人なんで、「～じゃなきゃ」とか「～に決まってる」というのはなくって、逆に相手がそうでたら「こうだったら～」って別の手を提案したり、下からものを言うほうが多いですね。自分は現場では底辺だと思っているので。監督＝サービス業って感覚は日本には少ないですけどね。まあそればっかりでは困るけど、まあバランスですかねー。」

本日はありがとうございました。最後にTAMA CINEMA FORUMやINDIES in TAMAについて何かコメントがありましたらお願いします。

「サービス精神を忘れないで下さい（笑）。自主映画はなかなか上映まで到達できないことも多いですし、逆に上映したくても作品が集まらないこともあるでしょうし。とにかく頑張ってください。」

【聞き手　セーロー、増田】

ショコラ
CHOCOLAT

監督　ラッセ・ハルストレム
出演　ジュリエット・ビノシュ　ジョニー・デップ
　　ジュディ・デンチ

●フランスの保守的な村に子連れの女性ヴィアンヌがチョコレートショップを開く。始めは村人からよそ者扱いを受けるが、彼女の作るチョコは次第に人々の心の隙間を埋めていく事になる。

夏井　紀久子
＜スウィートな夢を忘れたくない人へ＞
大人のメルヘンだな～と、思った。きれいなショコラの数々の甘い不思議な香りが、旧弊な人々の意識を変えていく。主演のジュリエット・ビノシュは、一見知的でお堅い容姿なのに、いつも以上に駆け出してゆく裸足が似合い、自由を象徴してステキ。海賊ジョニー・デップも、必見！全国津々浦々まで2世紀になってしまった日本で、しばし優しい夢を思い出した。

[★★★★☆]

望月　裕香
＜スパイシーな甘さを初めて知りました＞
全体的にお伽話の雰囲気ですが、「相手を拒否したり禁止するよりも、受け入れることに人間としての価値がある」というテーマが一貫しているせいか、非現実的な要素は薄れ、ファンタジーが苦手な私でも楽しめる内容でした。ジョニー・デップのキャスティングには少し疑問がありますが、ジュリエット・ビノシュの自由の女神のような魅力が堪能できる作品です。

[★★★☆☆]

真鍋　薫子
＜Too sweet to eat＞
予告編を観て勝手に大人のほろにがラブストーリーだと思っていた私。結局「チョコを食べればみんなハッピー！例え考え方や外見が違っても受け入れることが大切だ」みたいな道徳的でスイートな話になっていたので、ちょっと残念だったのでした。やっぱりチョコはビターだよね。あと、冒頭部分のおとぎ話的な要素をもっと強調してほしかったな。でも音楽はとっても素敵です。ジョニーも素敵。

[★★☆☆☆]

トラフィック
TRAFFIC

監督　スティーブン・ソダーバーグ
出演　マイケル・ダグラス　ベニチオ・デル・トロ
　　キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ

●あるメキシコの警官が、上層部と麻薬組織の癒着に直面する。その頃アメリカも政府組織で麻薬問題に取り組む事になる。そしてその鍵を握るのがアメリカとメキシコの間を結ぶ巨大麻薬組織の存在であった。3つの話を軸に裏社会を壮大に描く。

舟口　聡
＜時代はスピルバーグよりソダーバーグ＞
デビュー作より10余年ようやく出た傑作。"イギリスから来た男"も良かったけど今回はよりシャープにより濃く自分のカラーを出していて（特にカメラワーク）言う事なし。キャスティングはベニシオ・デル・トロの1人舞台。ラストの言いようのないカタルシスにソダーバーグの成長を見た気がした。次回作が最も待ちどうしい監督の1人である。

[★★★★☆]

野村　浩利
＜頭の中が渋滞＞
前作「エリン・ブロコビッチ」では個人的に不評だったフィルター＆手持ち撮影が、良い効果を生んでいたのが好印象でした。3つの物語のうち、青（マイケル・ダグラスのやつ）がいまいちな感じでしたが、ベニチオ・デル・トロのラストがとても素敵で、気持良く観終われて良かったです。麻薬のお話なのに、なぜ「交通」？と不思議だったが、「不正取引」という意味もあるらしく納得。

[★★★☆☆]

遠藤 亜佐子
＜灯台もと暗し、とはこの事で…＞
今年のオスカー珠玉の作品。脚本の出来は見事。たしかにアメリカとメキシコを結ぶ麻薬密輸組織を暴くというスケールの大きな話だが、マイケル・ダグラス扮する国家的麻薬取締り最高責任者の一人娘が実はジャンキーで、それに翻弄される彼の姿がまた実にカッコ悪い。そのリアルさが秀逸。一人娘も救えずに国家を救える訳がない。そうさ、そうなのよ…。

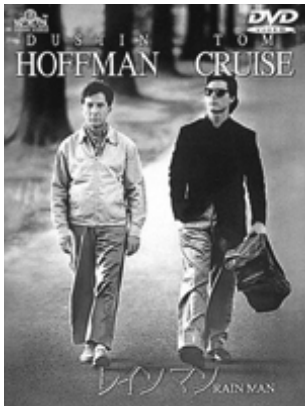
[★★★★☆]

ザ・名作プレイバック1991

その年の映画賞受賞作品を中心に〝名作!〟とともに当時を振り返ろうというこのコーナー。今回は１９９８年のアカデミー作品賞、カンヌ国際映画祭グランプリ、キネ旬報ベストワン作品を取り上げながら、当時を振り返ります。

アカデミー作品賞受賞作
レインマン

監督：バリー・レビンソン
製作：マーク・ジョンソン
脚本：ロナルド・バス
製作総指揮：ピーター・グーバー
出演：ダスティン・ホフマン
　　トム・クルーズ



この年のアカデミー賞の主要部門を総なめした作品。思い起こせば、あの頃の日本はバブル景気浮かれていたというのに、今はデフレの真っ只中、なのに日本の映画料金・・・、下がりませんねぇ。

物語は父親の遺産を相続した自閉症の兄（ダスティン・ホフマン）を、遺産目当てに無理やり施設から引き取った弟（トム・クルーズ、若いっ！）が、徐々に兄弟愛に目覚めていくというもの。多くの人が誤解交じりに使っている『自閉症』という言葉が一体どんな病気を指すのか、ダスティン・ホフマンはそれを見事に演じきっている。

この作品を観た当時、自分に自閉症の兄が突然現れたら、あんな風に接することができるのか？　お世辞にも兄弟仲が良かったとはいえない自分にとって、考えようにも全く想像すらできず、あれは物語だから・・・と片付けていたことが、父親となった今妙に納得させられる。血の繋がりって大切だよね。ウンウン。

さて、この映画元々はスピルバーグが監督する予定だったものの、「インディアナ・ジョーンズ3」の撮影に手間取り、あきらめたんだとか。結局それが正解だったのか？いい映画です、是非一度観てください。

【中田】

カンヌ国際映画祭グランプリ
ペレ

監督：ビレ・アウグスト
原作：マーチン・アナセン・ネクセ
脚本：ビレ・アウグスト
声優：マックス・フォン・シドー
　　ペレ・ベネゴー

この年のカンヌ国際映画祭グランプリが「ペレ」。簡単に内容を説明すると、スウェーデンからデンマークへ出稼ぎに出てきた父と息子。息子にとって、父はいつも正しく、頼りになる存在。その父の言う事を信じて、ある農場に農奴として雇われるが、そこではまるで家畜同然の扱いを受け、また、領主にへつらう父の姿を見て、憤りをおぼえ…。

とまあ、原作がプロレタリア文学だけあって、観終わったあと考えさせられる問題作です。これでもかというくらいの差別を受けるんだけど、これを声高に主張するのではなく、当時の農民の生活を忠実に描く、ということに主眼を置いているのでしょうね。地味な作品なので、カンヌでの

作品上映後の記者会見では二十人足らずのジャーナリストしか集まらなかったそうな。印象に残るのは、父親役のマックス・フォン・シドウ。情けない感じがよくでてました。

この年の日本はというと、まさにバブルの真っ只中。リクルート問題発覚、ソウル五輪開催、昭和天皇危篤、首相は竹下、競馬はオグリ（？）、とまあいろいろありました。そんな中、私はというと、25歳のOL5年目、恋も仕事も大忙し。それから更に5年も働き、お局様になろうとは思いもよらぬ日々を送っておりました。

【田中】

キネマ旬報 ベストワン
となりのトトロ

監督：宮崎駿
製作：徳間書店
脚本：宮崎駿
声優：日高のり子、坂本千夏、糸井重里

ⓒ二馬力・徳間書店

『となりのトトロ』…なつかしいねー。この作品は今でも誰から聞かれてもまっ先にあげている、僕の心のベスト1だよ。

丁度、この作品公開時に、あるアニメ雑誌のイベントで千代田区役所隣の千代田公会堂に、（まだ浪人中にも関わらず）いい席とりたくてしかも朝一でいってね、その時は作者の宮崎駿監督のトークショウ&『トトロ』先行試写会と『ラピュタ』の豪華二本立ての上映。

あれから、こうしたイベントに監督自身が顔をみせたという情報は聞こえてこないから（というより、御本人はこうしたことが余りおすきではないらしい）、僕自身大変貴重な体験をしたことは確か。

あと毎回、ジブリ作品のコピーには意表を突かれるね。

コピーは全部あの糸井重里氏がつくっているんだけど、確か『トトロ』は「わすれものをとどけにきました。／このへんな生き物はまだ日本にいるのです。たぶん…」で、ちなみに余談だけど、今年公開の『千と千尋の神隠し』は「トンネルのむこうは不思議の町でした」なんだけどね。

ところで、『トトロ』で糸井氏は、サツキ&メイ姉妹のお父さん役でも声の出演をしていたんですけど皆さん知ってました？

【鴨志田】

TAMA映画フォーラムからのお知らせ

TAMA映画フォーラムとは

このTAMA映画フォーラムは「映画」というものをきっかけとした「市民の広場」として発足し、世代・性別・立場を超えて、誰もが気軽に参加し、楽しみながら活動できる出会い・交流の場として、今年で11年目を迎えました。

TAMA映画フォーラムの実行委員は、多摩市民を中心に常時参加メンバー30名前後で構成され、秋の映画祭に向けて活動しています。映画祭というと華やかなイメージを持ってしまいがちですが、月2回の実行委員会を開き、上映プログラムを決めていく他、チラシやプログラムも実行委員会で手分けして作製します。

その活動は映画祭の企画、運営はもとより、運営資金作りのためのフリーマーケットや、日本の若手映像作家にスポットを当てた自主映画の定期上映会など様々な形で、一年を通じて行われています。

実行委員会でのミーティング風景
（ベルブ永山にて隔週日曜午後6時より開催）